

「いやあ、良かったですね。この時期にご希望物件のキャンセルがくるのなんて、滅多にありませんから」

福岡某所、PM7時。

A4のクリアファイルとタブレットを片手に隣を歩く不動産屋の担当が、菩薩顔で明るく微笑む。

気のいいおじさんという見た目のこの人は、一ヶ月先に引っ越す予定である地域の不動産屋だ。

「ねー！ 滑り込みで、本当に嬉しいです！ 連絡ありがとうございます！
ざいます」

慣れない住宅街の小道を、ワクワクしながらついて行く。

9時半には飛行機に乗って、東京に戻らねばならない。
春に昇進して、来月から九州営業部への異動が決まった。

下積みがやっとひと段落して、各店舗を担当するSV試験に合格。

お給料も上がったし、実力を認めてもらえるまで頑張ったという自負がある。

それに初担当が憧れの九州！

会社負担半分のマンスリーか、社宅の二択だった。

ハードな毎日になるのは覚悟している。

でもたまの休みに、広い部屋でゆっくりと暮らしてみたい！

もっとグリーンも増やしたいし、ホームシアターの部屋も作りたい！ と2LDK以上を希望して物件をさがした。

しかし、これがまたなかなか見つからなかった。

引越す地域と、今住んでいるところとの一番の違いは、その家賃の安さ。驚きだ。地方の良さのひとつは、ここにある。

もうこれは、広さをもう少し欲張ったとしても……予算内に収まるのではないか。そう考えて方向性を変えた。

そして辛抱強く探した結果、見た目のスタイリッシュさ、治安の良い立地、なにより……新築！分譲向けのマンションを賃貸で出している最高の部屋を見つけることができたのである。

……けれど当然、人気物件。

貸し先が決まった後に連絡をして、それでも諦めきれずに、キャンセル待ちをすることにした。

引越しまであと一ヶ月を切ったところで、まさかの奇跡！

キャンセルが出たと連絡をもらった時には、運命を感じた。

ちょうどそのタイミングで、福岡への日帰り出張が入った。

それでせっかくなので東京に帰る前に、内見にきたというわけだ。

ネットや資料で見っていた以上に素敵な外観に、思わず感嘆の声を上げる。

最高すぎる………！

エントランスを抜けエレベーターに乗り、建物の新しい香りを吸い込む。

「……ん？ あれ？ 電気が……ついてるぞ？」

希望している部屋へワクワクしながら入ったところで、前をゆく担当さんがそう言っ、首を傾げた。

「鍵も、空いてるな？ あれー？」

と、とにかく入りましょう！ と言われ、中に入る。

ぴかぴかの室内は明るく、画像で確かめた通り、いやそれ以上だった。

うわぁ………！ 本当さいつこう………！ 絶対住みたい！

……玄関でそう思っていたら、中から話し声が聞こえてくる。

「……いやー、賃貸かあ。別に買ってもよかかなーとは思っとるけどなー」

低く、よく通る男性の声だった。

リビングまで繋がる廊下で、担当と顔を見合わせる。
ガチャリとドアを開けた先に、二人、男性がいた。

「……お？」

「……え？」

黒いマスク、黒縁眼鏡。

耳にはたくさんピアスがついている。

ちよつとダウナーな雰囲気で綺麗な黒髪の、かなり背の高い男性が一人。

……見るからに怖い。

そして、スーツを着た男性が一人。
おそらくこっちは不動産屋だろう。

「あー……え？」

マスクを浮かせ首を傾げたその男性が、キリッとした眉を歪めた。

「ああ、ええと……。すみません、こちら……内見中でしょうか？」

「ええ、そうですけど？」

こちらの担当が放った質問に、でんっ、とした態度で肯定した男性に、反射的にムツとする。

「……どういことですか？」

イラつきながら尋ねると、そっけない返事が返ってくる。

「え、……いや、先に俺が予約したんすけど」

「ああいえ、こちらのお客様が先に……」

タブレットを見せようとする担当に、相手側の不動産屋が割って入る。

「あー……、少し、確認しましょうか。お二方とも、大変申し訳ございませんが、少々お時間いただけますか？」

そう言われると、納得がいけない顔をしたままにはなつてしま
うが、従うしかない。

黙って頷き、どうぞどうぞと手で促した。

彼らは廊下に出ると、何やら話し合いを始めたようだった。

「……」

「……」

待つ間、ほんのりダウン系いかつい男は余裕そうに、マスク
を下けたまま、にこにこしながらこちらを見ている。

……いや、なに？　なんでそんな勝ち誇った顔してるの？
ていうか私が借りるんだけど。

多少見た目が怖いからって、日和ったりしないんだから。
ていうか、いかついのに綺麗な顔してんな、くそ。

もう苛つきの方向が少し変わってきていることに気が付きながらも、ムカムカした顔を隠すことなく睨みつける。

すると、ふはっ、と空気を吐き出すように彼が笑った。

「……いやいや。そげん威嚇せんでも……」

余裕そうに笑った顔がむだに優しげなもの、さらにいけすかない。

腕時計を確認すると、7時半を少し回ったところだ。

あんまり長引くと、飛行機間に合わなくなっちゃうな……。

「……なに、なんかあんの？」

首を傾げ、トントンと自身の手首を指さした彼の手を見て、少しだけ驚いた。

手の甲に、大きく星形のタトゥーが入っている。

あまり見えていなくて気が付かなかった。よく見ると、両腕にも。

……え、……治安悪い系お兄さん……？

……なんか苦手だ……。

失礼だと承知しているが、咄嗟にそう思った。

こんなタイプの人と、仲良くなったことがないからかもしれない。

「……飛行機の時間に、間に合うかなって心配になっただけです」

少しだけ落ち着いてそう返すと、「ああ、そっか」と気のない返事をした彼にさらに力が抜ける。

「私……、来月から仕事こっちで始まるので……どうしてもここに住みたいんです」

「あー、そうなんすねー」

またしても、さらりと流される。

え？ 会話する気ある？ このひと。

「んー……。ま、そう言われても……。俺も自営業？　なんで、なかなか賃貸の申請が通らんで……」

……。でしょうね。その見た目なら、余計に。

いつもならここまで苛つかないのに、切羽詰まっている焦りからか、そんな失礼なことを思ってしまう。

この人のファッションや生き方に、なんの罪もないのは……。わかってるのに。

「……。え、あーでも、ここ……3LDKっすよ。一人暮らしでそんなに部屋、必要？」

「……」

……はあ……？

「……必要ですけど？　ていうか、そちらもお一人ですよね？」

「え、俺……一人って言いましたっけ」

あ、え？　家族とかいるパターンか？

確かにファミリー向けといえば、そうかも……。

早とちりした！ 既婚者か！

「あ、ごめんなさい」

「……いやまあ、一人なんすけどね」

……はあ……!!? なんだったの、いまのやりとりは。

「ちなみに俺は、仕事で使います。主に家で仕事してるんで。作業部屋を分けたくて」

「あー、そうですかー」

仕返しとばかりに、気のない返事をした。なんだか、どっと疲れてきた。

「あ……そっか」

ぽんっ、と拳にした手を打って、頭に電球がついた！ というような顔をした彼に、首を傾げる。

「お姉さんの場合……、あー。なるほど。アレっすよね？ もしかして……オシャレだし？ めっちゃ衣装持ちとか。あのー、仕事ばかりしてる最近の、典型的な……なんだ、あ！ 片付けられない人！ あ、捨てられない人？ だっけか。一部屋じゃ足りないのか。そうかそうか。……ええと、なんつーんでしたっけ、……汚部屋？」

……いやいやいや。そりゃ忙しい時には散らかるけど！
言うほどでもないわ！

「……片付いてます！ ミニマリストですから！」
見栄を張った。

ミニマリズムなんて分からないのに、なんとなく無意識で、そう返していた。

彼はきょとん、と一瞬表情を止めた。
それから、弾けるように笑った。

「あっはは!! 自分で自信満々に言うもんなんだ、それ! 知らなかった! 自称ミニマリスト、初めて会った」

「……なっ……!」

ばかにしやがって! まじでなんなの、こいつ!

口は悪いわ声はいいわ笑顔もいいわで、なんていうか全ツツツ部むかつく!

「……とっ、とにかく! 譲りませんから!」

「いやいや、こっちこそ。もう俺のモンやし、譲りませんよ?」

「なっ、どっ、……どっからくんの、その自信!」

「あっはっは!」

ガチャリ、と扉の音がした。再び入ってきた不動産屋の二人が、私たちを見て揃ってホッとしたような顔をしている。

……なんでだ。

「あー……、もう、打ち解けられてました?」

「全然？」「全ッッ然!!」

間髪入れずに答えると声が揃って、なんだかそれにもムカついた。

けれど、あまりここに悠長に長居できない。

できれば契約の方向で話を持っていきたい。

不動産屋二人の言葉を待たずに追い討ちをかけた。

「あの、すみません。私、あまり時間がなくて」

その言葉に彼らが同時に頷き、二人で顔を見合わせる。

そして意を決したように、強い眼差しでこちらをとらえる。

「そうですよね、大変申し訳ございません。ええと……こちら……」

「大変申し上げにくいのですが……」

不動産屋二人の話によると、この物件をこのなんちゃってオーナー系ムカつく男と私が、どうやらダブルブッキングしてしまっているようだった。

完全に不動産屋同士の連携ミスらしい。

「……と、いうことで……あの、もしよろしければ、なんですがお部屋もございますし、ここはひとつ、お家賃折半で、お二人でシェアされてはどうかと……」

「絶^{ずえ}々々ツツツツ対に、いやです！ 困ります。ていうか、なんで……？ 私、ここで……一人暮らし、楽しみにしてて」

間髪入れずに、とうにか遮って断った。

やめて、ほんと泣きそう。

不動産屋は二人とも『心中お察しします』みたいな顔をしているけれど、信用できない。

「はい、重々承知しております。ですので……、お家賃のほうを、十パーセント！ それぞれこちらで負担させていただきま
す！ 新築でこのお値段は、なかなかありません」

……空いた口が塞がらない。

この男と、折半……？

ルーム……シェア……ですって……？

「あー、いや……、家賃……。俺、そこんところは全然困ってない
んすよねー……」

歯切れの悪い口調のタトゥー男に、彼側の不動産屋が微笑んだ。

「まあそうは言いますけどね、九重さん。こうすることですね、彼女が保証人として立ちます。審査がとても通りやすくなりますよ」

「あー、なるほどね？ それは捨て難い選択っすね」

「そうでしょうそうでしょう？ 捨て難い選択です！」

「いや捨てよう!? 何言ってるの!? 勝手に保証人にしないでよ！」

真っ赤になって相手側の不動産屋の胸ぐらを掴むと、「お、落ち着いて……！」と両手を上げられた。

拳銃なんて突きつけていないのに、まるでこっちが悪いみたいじゃないか。

途方に暮れていると、タトゥー男がじつ……とこちらを見返してくる。

そして意を決したように、小さく二、三、頷いた。

「……あー、じゃあ、アレっすね。俺やっぱここ買います。んで、俺がこの人に、貸すってのは？ それなら……、いいんじゃないですか？」

大爆弾が落とされた。

「……は……？」

思わず、ゆっくりと、……男の方を見上げる。

……いま、なんつった、この……おとこ……。

「その方がいいでしょう？ 家賃、めっちゃ安くするし」

「え……は……？」

理解がいまいち追いつかない。

「次が見つかるまで。ここで寝泊まりすればいい。仕事、始まるんでしょう？ 部屋なら、まあ、あるし」

「なっ……、え、なっ……」

背後からニコニコしてぽん、と肩を叩いたのは、こちらの担当さんだった。

「どのみちお家賃、半分以下です♡」

「な……」

……そして味方が、誰もいなくなつた。

金魚のように口をぱくぱくさせていると、彼は憐れむような、慈しむような顔をして私を見下ろした。

「一緒に住むことになったら、絶対悪いようにはしません。大丈夫。安心して引越してきてください」

いやいや、真っ黒な炎の柄が腕に巻きついていている人にそんなことを言われても。

……ただただ、怖いだけである。



けれど結論、彼はめっちゃくちゃに良い人だった。

福岡に就いて、一ヶ月が経とうとしていた。予想はしていたが、本当に忙しい。

担当する店舗は、九州中にある。

巡回に追われていたら、休みとか、あつてないようなものだ。
じっさい今月十日間の休みがあつたが、そのうちの六日間は夕方や昼間に近隣店の対応に追われた。

あとの四日間は、区役所へ行き、美容院へ行き、慣れない土地で足りないものを買に出る日々。

ほとんど家で過ごせる時間がなかった。

……だけど、心は折れていない。

慣れない生活に馴染むなんて暇はないものの、食生活もほとんど乱れていない。

疲れてはいるけれど、体調を崩すなんてこともまだなかった。

……なぜか。

それは……同居中の男に、食事管理を……されているから。

熊本からの新幹線の中で、私はこの怒涛の一ヶ月を回想していた。

——なんでこんなことになったんだっけ？

結局、私はあの日から一ヶ月経たないうちに、当初希望していた物件に引越すことになった。

もちろん条件は、あの鼻持ちならない男との家賃折半、ルームシェアという形で。

彼の名前は、九重^{このえいたる}至。

私の七つ上、九州生まれ九州育ち。

夜間部屋に閉じこもって仕事をしている彼は、あのマンションを一括で購入した。

経済状況は潤沢な人のようだ。

見た目だけでいうと、悪そうなやつはだいたい友達、みたいなタイプである。

ちなみにどんな仕事をしているのかは、まだ聞いたことがない。

広いリビング、風呂やトイレ、キッチンなどの水回りは共用になることが避けられないので、当番制で掃除する。

……と提案した。にも関わらず、「え、なんで？ 俺が全部やるよ？」と言われ、「俺のほうが家にいる時間長いし、気にせんでよかよ」とまで言われた。

続けざまに「それに、ここ、俺んちやし」と言われた時にはなんとなくちよつとカチンときたけれど。

そこまで家事が好きではないのも手伝って、それに対して断る理由もなかったので「アッ、そーですか」と返事をして。

おかげで、日々九州中を飛び回って帰りが遅くなるにもかかわらず、いつも家はピカピカの状態だ。

……これは想定外の、正直助かりすぎるメリットだった。

しかも、家に帰ると……。

「おかえり。な、飯食った？」

「ただいま、帰りました……。ごはんは、まだ食べてないですけど……」

「あらま。疲れとうね。なんか作るわ」

もう随分前にツッコむタイミングを逃してしまったけれど、九重さんは毎回、似合わないチェックのエプロンをつけている。

だけどその姿は、もうこの一ヶ月で慣れた。

「……んー、じゃ、胃に優しいモンにするかー」

あのダブルブッキングで失礼な言葉ばかりを連発していた人と同一人物であることが、いまだに信じられない。

「いや、あの……」

けど、今日こそ言おう、自分で作るからいいです、と。

正直これ以上恩を着せられたくない。……なんか怖い。

冷蔵庫の扉を開けて背中を向けている彼に、意を決して声をかける。

「あの九重さ……」

「んー、けどガッツリ食べたいか？ ああ、つか先に風呂入ってくる？ シャワー浴びるついでに、さっき洗って溜めといたけん」

「えっ」

振り向き、あっけらかんとデッカい手でおたまを持っている彼に、思わず顔を顰めた。

手もゴツゴツしていて大きいので、おたまがスプーンみたいに見える。

そして有無を言わずデッカい身体をオラオラとぶつけられながら、浴室の方向へ押しやられた。

清潔感のある柔軟剤に混じった、石鹸と素肌の匂いにする。

この毎回ふわっと感じる彼の香りは、とても好きだ。

家で仕事をしているわりには筋肉質なその体は、大きくて既に安心感すらある。

ばいんばいんとぶつけられる彼の、分厚い胸が跳ね返った。

「ほら、おら、早く。疲れが、取れん、やろが」

「あつ、ふおつ、ちよつ、おおっふ」

そう、これがほぼ毎日のルーティーンになっているのだ。

本来なら、もう体に力なんて入らないくらい疲れている。

以前だったらこんなに疲れて帰る日は、自室のベッドにパンツスーツのままダイブしていてもおかしくはなかった。

——カポ——ン……

「……っあー……、きーもちいい……」

それなのに気がついたら、毎度ぴかぴかに磨かれた一番風呂に
チャップンとお行儀よく浸かっている。

……正直、最高だ。

ごはんも朝晩バランスが取れたものを食べられているし、なん
だったら引越し前よりも肌の調子がいいものである。

ルームシェアする覚悟を決めた時、彼は今までにないくらいの
笑顔だった。

訳が分からなかったけれど、「せっかく一緒に暮らすんやし、
身の回りのことはまかして」と言われて。

「——いや、……だからなんで？」

そしてお風呂で一人になった時、トイレで一人になった時、明
日の準備まで完璧にリセットした状態で自室に戻った時。
こうして密かに自己ツツコミを入れるのが常になった。

ただのルームメイトなのに、どうしてここまでよくしてもらえるのかわからない。

それともうひとつ、九重さんと暮らし始めてから、大きな問題ができた。

——朝起きたら、ほぼ毎朝。

パンツがものすごいことになっている。ぐっしりなのだ。しかも、今どき思春期の男の子ですらこうはならないのでは？　つてぐらいに。

恥ずかしい話だが、こちらにきてから二週間ほど経ったあたりから、毎晩……。

その、なんというかいかかわしいというか……。

えっちな夢を見るようになったのだ。

そして気まずいことに、その淫夢の相手というのが……。

今一緒に住んでいる、このいかつい見た目の家事完璧人間、九重さんなのである。

——さすがに、どんなに整った見た目のイケメンとはいえ、いい歳こいて毎晩妄想夢でルームメイトをオカズにしてるとか、あまりにも恥ずかしい。

「……ん？ 俺の顔になんかついてる？」

お風呂上がりになさっぱりとして、促されるままテーブルにつき、完璧に煮込まれた塩肉じゃがを箸に乗つけたまま、思わず彼をじいっと見つめてしまっていた。

「あ……いえ。すみません、いつも……。ありがとうございます」

ペコッと頭を下げる。

なにはともあれ、とても助かっているということに変わりはないわけ。

彼は食を進めながら「……なに？　急に」と首を傾げて続きをうながした。

「……九重さんがいなかったら死んでたと思います。忙しさに目が回って」

彼は一瞬だけ目を大きくして、それからにこにこして、口をもぐもぐさせた。しっかり飲み込んでから「いいよ、そんな。こっちも、人がいると作り甲斐あるし」と答える。

「俺、家事……まあまあ好きやしね。それに……、なんていうか……こうして一食でも誰かと家でメシ食えるの、ちよっとなんかこのへん、楽にならん？」

すりすり、と自身の胸の中心を摩った彼に、小さく頷く。
口数は決して多くない。

いかついし、デッカいから……、ついそちらに氣を取られてしまふけれど。

「俺も、おんなじ。普段あんまり人と接触する機会ないし。むしろこっちがありがたい」と

それは意外だ。

「そうなんですか？　悪そうな奴はだいたい友達、みたいな見た目なのに？」

「初日から思ってたけどきみ、変なところで言葉躊躇するけど変なところで容赦ないよな」

「あ、すみません……。調子乗りました」

「いや調子乗る乗らんとか、そげんもん要らん。むしろ遠慮せんで出さんば。外、疲れるやろ？」

そして意外に、穏やかだ。

だけどそれを素直に受け止めるには、まだまだ彼に対して慣れが必要なわけで。

「……初日とは大違いの優しさですね」

「……ええ……？　俺もともとういう性格っちゃけど……なんも変わらんと思うけどな……？　え、なん……？　やっぱ見た目か……？」

「ふふっ……」

言葉ひとつに、こうして真面目な顔して考えてくれるような。

そんな、見た目は怖いけど、優しい人。

——ああ神様ごめんなさい。

こんな素敵な九重さんを、……夢の中でオカズにしているなんて。

けどどうして、毎晩なんだろう。

溜まってるのかなあ。もう長いこと、そんな相手もないしなあ。



——…夢で九重さんとしてしまふ場所は、前に住んでいた東京の部屋だったり、ラグジュアリーなホテルだったり、いろいろだ。

けれど、今日はそのどこでもない感じだ。

古びた丸太で造られた狭い小屋の中で、彼に後ろからしっかりと抱きしめられていた。

コテージとは到底いえない、二人寝転がるのがやっと、くらいの広さ。

どうやら森の中にあるようで、小窓の外はしずかな夜がどこまでも広がっていた。

記憶にある彼のふわっとしたムスクの香りに、少しだけ湿度と体温が混じった匂い。

シャツ越しのこの匂いがたまらなくて、胸元に渡っていた彼の腕を、ぎゅうっと両腕で抱き込んだ。

腕まくりしたシャツから、炎柄をしたタトゥーが覗く。

近くで見ると、黒一色なのに濃淡があって、綺麗だった。

「……どしたん？ 甘えんぼさんやね」

低くてお腹に響く、囁くような彼の声。

夢の中の九重さんはいつも、超がつくほど甘い。

「けどこれじゃ触れんね……、ほら、いつもみたいに触らして？」

しがみついていた両腕の力をふわつと抜くと、頭の後ろで微笑む低い吐息を拾う。髪に届いた余波でぞく……つと体が小さく震えた。

「俺にはいいけど、そんなすぐ男を信用して明け渡したらいいけんよ？ 危なっかしか……」

後ろからまわってきた両手で、ルームウェアをたくし上げられる。

両方の胸が、ふわつと包み込まれた。

その手はとても大きくて、指の関節がゴツゴツしている。

切り揃えられた爪が目に入った。

九重さん……指先、きれいだなあ……。

少しだけカサついたその指が、ブラの上からふにふにと感触をたしかめている。

好きにされている感がなぜかすごく良くて、思わず目を閉じて
「んっ……♡」と甘い声が漏れた。

「……かわいい……」

んー……と頭に擦り寄られる。そこにすりすり頬を擦り付け
られる感触。

彼の骨ばったかたい指先が、ブラの上辺をめくった。

「あー……、おっぱい出てきたー……♡」

丁寧を持ち上げて、ブラをずり下ろす。

それを片方ずつ丁寧にやってから、彼は小さく「よし……」と
言って、ふたたびふんわりと両手で包み込んだ。

指先がゆっくり、触れるか触れないかくらいの弱さで、くるく
ると乳輪をなぞる。

「ふうっ……♡ ……ん、うあ……♡」

すす……となぞっていくその指先が、いつ敏感な突起に触れるか分からなくて、そわそわしてしまう。

早く、そうしてほしいような、怖いような。

おっぱいばかり意識していたら、急に耳たぶをかぷっ♡と甘噛みされた。

「は、……っん……♡」

くちゅん……♡　ぴちゃ……♡　耳輪を舐め回されて、ふるふると体が震える。

耳に気を取られていると、今度はぐうつ♡　と指で乳首を押し込まれる。

「んうつ♡　あ、う……♡」

指先が埋もれて見えないくらい、食い込んでいる。

「気持ちいいーと？　なんか飛び出してきてたから。直さんといけんかな、って」

ぐりぐり……♡ とねじ込まれて、思わずお腹の奥がきゅ
うっと締まる。

「ひ、あっ♡ ……ん、う♡」

指が離れると、ぷるっと再び主張してきたそこを、「うーん、
どうしても出るっちゃけどー……」と確かめるように指先で乳首
を押し込み、ぱっと離して、もう一度ぐうっ♡ と押し込まれ
た。

「やつ……、あうっ♡ それ……え♡」

「ん、ふふ。好き？ ……あ……、もう、声かわ……、エ
ロ……」

首筋にちゅっ、とキスをされる。

九重さんの体温と唇の柔らかさに、体の奥が溶けるようにじゅ
わっと湿った。

あわせて甘噛みされる耳もくちゅくちゅいうので、余計にぞわぞわしてくる。足を擦り寄せてそれに耐えるしかない。

ああ、お股が……じんじんする、よう……♡

そうして遊んでいた中指が、カリッと乳首を引っ掻いた。

「……ひああ♡」

「あ……、気持ちいいな？」

「んう、あ♡ ……っあ♡ や、やめ……♡」

「んー……どうした？ 足……揺れとる。ここ……？」

ルームウェアもショーツもぜんぶ無視して、するりと間から片手が忍び込む。

だけでもう片方の手も、乳首をカリカリするのをやめてくれない。

「ああ♡ あ、……♡」

急に直に触れた指先が、ツツ……♡ と割れ目をなぞる。

「あれ……、なんかここ……びっしょびしょやけど……」

「……あゝ……♡」

体の芯を何かが駆け巡って、なぞられただけでぶるぶるっ、と
下肢が揺れた。

「……あれ。……ふ、まどろみながら甘イキしとーと？ まだな
ぞっただけよ？」

ヒクついているそこに、ぬちゅり♡と音を立てて、指先がかき
分けるように入りこむ。

「はあう……ッ♡んくう……ッ♡」

「……ゆー……っくり……、しような？ ほら、こーやつ
て……」

九重さんの低い声が耳に直接響き、指がぬる……♡と媚
肉を撫でて、指の付け根までぬちゅっ……♡と挿入される。

「ここまで、……入る。覚えて」

九重さんが中指を入れたまま、あたたかい手のひらでぜんぶを包み込んだ。「……ね？」と言いなながらゆさゆさと揺らされる。

「はあ……っ♡ う、うごかしちゃ……や、あっ」

「動かさんと、覚えんやろ？ もっかいやるけんね。……ほら、俺の指は……ここから……」

「ああ……ッ♡」

ぬるっ♡ と指が入口に戻ってきて、ふたたび膣奥に慎重に差し込まれる。

「……ここまで、入るって。……ね？ 覚えた？」

ゆさゆさと広い手のひらを動かされるたびに、愛液で冷えた入口が温められて、揺れるたびに敏感な突起が刺激される。

「うう……っ♡ んくっ……、あうっ♡」

「……で、なんかコリコリしとおこれは……なん？」
ぐりぐり♡ 包まれたままクリトリスを揺らされる。

「は……♡ あ、ん♡♡」

「おっきい声出るなあ……ここ。あと……めっちゃまんこ締まる……」

こりっ♡ こりっ♡ 親指の付け根が擦りつけられた。

快感が膨れ上がっていくのを内側から感じる。

思わず彼の手のひらに押し込むように、腰を押しつけてしまった。

「ああ……、腰、動いとお……、はは。……エッロ……やーば……」

「んう……♡ ん、ん♡♡」

はあっ……、はあっ……、と九重さんのえっちで熱い吐息が首筋にあたるたびに、どんどん昂ってしまう。

強請るように擦り付ける腰が止まらない。

腰が動くたびにぬちゅっ♡ とぬかるむ音がして、いいところに挿ると、

「ん……ああ♡」

声が漏れる。

九重さんが息を荒くして、手を動かす速度を上げた。

ぐりぐりぐり♡
と強い刺激がナカと奥で同時に響く。

「や、あッ♡
あぁうッ♡
それ……ッ、
イツ……♡
だえ……」

「……はあつ、……はあつ、『ダメ』って……、腰、動いとーや

ん、ダメやなかる？ イキたいんやろ？ いけば、ほら」

ぐりぐりぐりっ♡ と掻き回されて、頭の中が真っ白に弾け

る。

「あ、だめ、あ♡んっう……っ♡♡♡」

炎がからみついた腕をぎゅうううと握りしめたまま、大きく絶頂する。

何度も奥が収縮して、きゅうきゅうと九重さんの指を締め付けているのが、感覚でわかった。

「はあっ……、あー……めっ……ちや締まっとお……。ばーりかわい……♡」

低く掠れた声を出して、九重さんは体を少し起こした。

背後で息を荒げたまま、それなのにまるで宝物にでも触れるかのように優しく、横から瞼にちゅうっ……とキスをくれた。

……何度も、何度も。深く、眠りに落ちるまで。

憎たらしいアラームが、スマホから陽気に流れてくる。

目を覚まし窓の方を見ると、もうすでに朝日で外が明るい。

——…まだだ……。

また、九重さんといえっちなことする夢、見ちゃったよ……。

「んううう……」

声にならない唸り声をあげて、顔を覆った。

……参ったな……。

「おー、おはようー」

支度をしてリビングに行く、九重さんはちよつとだけ疲れの見える笑顔で「朝飯あるよ」とターナーを握っていた。

デッカい手に収まったそれは、もんじゃ用のヘラくらいに見える。

「おはようございますー」

いや。唯一の救いは、昨夜のあれが『共有の出来事』ではないということだ。

幸い、九重さんは私が毎晩えっちな夢を見ているなんて、知らないわけで。

同時にそれが私の中だけの羞恥であり、苦しみでもあるわけなんだけど。

目玉焼きの絶妙な焼き加減に感心しながら、いつものように、何事もなかったかのように口を開く。

「あ、九重さん。今夜なんですけど、近隣店回った後お店の人たちと飲みに行く約束をしたので、ご飯は要らないです」

「お、そうなん？ 帰りは？ タクる？」

「時間によりけりですね」

「オーケー。俺も今日は夕方からジム行って、そっから用事で家におらんけん」

「ああ、ジム行ってるんだ。だからあんなに身体が……」
脱いだらしっかりと締まってて、セクシーなんだね。

「……え？」

「——え？ あ」

しまった、と思った時には遅かった。

「え、なに。今の。……俺の身体が、なに？」

笑顔のない視線に、ピシリと固まる。

朝のまだ頭が回らない時間は、ことごとくダメだと猛省した。

「あー……、なんでもないです！ 服越しにも、鍛えてそうだなって思ってただけで。ではでは！ そういうことだね。ごちそーさまでした！ いつてきまーす！」

顔も見ずに、歯磨きもせずに飛び出す。事務所で磨こ。
駅に向かって走りながら思う。

——やばい！　ほんとに何やってんの私！　もう~~~~~！